

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370051

研究課題名(和文)唐五代期における道教の布教と社会での受容についての研究

研究課題名(英文)A study on Taoist missionary work and acceptance in society during the Tang / Five generations

研究代表者

遊佐 昇(YUSA, Noboru)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：40210588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：唐・五代期においての道教の俗講で用いられたテキストの研究である。敦煌文献の中に、具体的な道教の俗講に関連する文献が存在していた。具体的には、BD1219, BD7620文書である。本研究は、これらの手書き文書の活字への翻刻から始めて、その内容の検討を行い、そこから道教の俗講の具体的な様相の検討を行った。この成果を通して、これまで不明であった道教の俗講の具体的な様相の一部が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：It is a study of text used in Taoism's popular lecture (道教の俗講) at the time of Tang & middle dot; Five (唐・五代) generations.

In the Dunhuang (敦煌) literature, documents related to specific Taoism lectures existed. Specifically, they are BD 1219 and BD 7620 documents. This study starting with the reprinting of these handwritten documents into typewriting, examined the contents, and examined the concrete appearance of Taoism's popular lecture. Through this result, a specific aspect of Taoism's popular lecture which was unknown up to now has been revealed.

研究分野：敦煌学、道教

キーワード：道教の俗講

## 1. 研究開始当初の背景

唐・五代社会において、仏教と道教が一般社会に存在していた仏寺・道観において俗講と呼ばれる宣教活動を行っていたことは、九世紀中ごろに遣唐使として中国に滞在していた円仁の滞在の記録『入唐求法巡礼行記』に記載されていることから確かめられる。

そうではあるが、仏教においても、道教においても、その俗講に用いられた直接の資料が残されていないことから、具体的な研究は進められることはなかった。

その状態を飛躍的に進めたのが、敦煌文献の写本がマイクロフィルムとなって国際的に研究者に供されるようになったことにある。その写真版を通じての写本の判読、及びその研究を通して、写本群の中に講經文、變文と呼ばれるようになる一群の講唱体の文書が発見され、それに対する研究が盛んに進められたことになった。その時期の成果をまとめたものとして金岡照光『講座敦煌・第9巻・敦煌の文学文献』1990年4月が挙げられる。

ただ、この時期までの研究は、公開されていた写本に限りがあり、その範囲でのみ進められていたことから、仏教に関連する資料が多く見られ、道教に関連する資料はほとんど見られなかったことを反映して、俗講及びその周辺に関する研究は、仏教に関連するものが中心に進められた。

その後、早くに文献の公開を進めていた英国蔵文書(スタイン文書)、フランス蔵文書(ペリオ文書)に加えて、中国蔵文書(中国国家図書館蔵BD文書、及び各地の研究機関、図書館蔵文書)が、明瞭な写真版で文献の公開を行うようになり、これまでの研究をより広げて進めることができるようになった。この間の研究については、于向東『敦煌変相変文研究』2009、李小荣『敦煌道教文学研究』2009、荒見泰史『敦煌講唱文学写本研究』2010等が挙げられる。また、鄭阿財、朱鳳玉主編『敦煌学研究論著目録1998 - 2005』2006、朱鳳玉『百年来敦煌文学研究之考察』にその動向がまとめられている。

中国蔵文書の公開が進むにつれて、その中に含まれていた道教関連の文書に注目されるようになった。その中で、WANG Ka『敦煌道教文献研究・目録篇』2004(以下『WANG Ka目録』と簡稱)は、中国国家図書館蔵の道教関連文献について指標の役割を果たした。ここには、これまでの敦煌文献中の道教文献研究において欠かせない役割を果たしてきた吉岡義豊『敦煌文献分類目録 道教之部 スタイン将来大英博物館蔵』1969、大淵忍爾『敦煌道教・目録篇』1978には載せられていない数多くの中国蔵(BDナンバー)の文件が紹介されていた。この『Wang Ka目録』の公刊の意義は大きい。

本研究は、これに先立って進めた「敦煌文献および四川石窟資料から見た道教・仏教の

社会への受容と信仰」(基盤研究(C)2010~2012)を継承している。

先の研究では、道教の俗講における直接資料と考えたBD1219文書の翻刻から始めて、具体的な内容の検討を行い、道教の俗講の実態の一部分を明らかにすることができ、また、その作成が道教經典に基づいていることを立証した。更に、当時の蜀地との関連について仮説を立ててつながりを求めたが、この点については、まだ十分な立証には至らず、問題点として残している。

## 2. 研究の目的

本研究は、現在に至るまで中国社会の中に継承されて信仰を受けている道教、仏教が、どのような経由をたどって、社会の人々と接触し、浸透して受容されていったのかを、道教、仏教の二教が社会の中に広く浸透していった時期とされる唐・五代期に焦点を当てて、その具体的な方法の一つであった俗講をテーマにとり、その実態を具体的に把握して、社会の人々とどのようにつながりを持っていたのかを解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、他に発見されることがない俗講に関する直接資料を敦煌文献中から発見して、その翻刻、及び解読を行って、唐・五代社会に行われていた道教、仏教における俗講の研究を進める方法をとった。特にこれまで資料の問題から、研究の進んでいなかった道教関連の俗講の解明に力を注ぎ、道教の俗講が仏教の俗講と必ずしも同様の形式を持つものではないことを確認しつつ進めた。更に、具体的な進行として、『Wang Ka目録』に「道教布施発願講經文(擬)」とBD1219と同様の擬題が付けられているBD7620文書が道教の俗講に用いられた台本であるのではとの仮説を立てて、BD7620文書の翻刻から始めて、内容の検討を行い、その内容そのものが道教經典と如何に関わりを持っているのかの検討を行って具体的な研究を進めた。

## 4. 研究成果

本研究の成果として、以下の2点に分けて報告を行う。(1)これまでに確認されてきた俗講に関する資料を敦煌文献中に見られる資料と照らし合わせることで、道教の俗講の形態を考える。(2)唐末、敦煌における帰義軍時代に作成されたと考えられるBD7620文書の翻刻、解読を通して得られた具体的な内容から道教の俗講を考える。

(1)道教の俗講について考えると、唐代の社会の中でそれが開催され、その中で行われた講經の記録が、前掲した円仁の『入唐求法巡礼行記』に残されている。開成元年(841)正月九日玄真観で開催された俗講の講經で講師の矩令費によって「南華等の經」が講じられたと記録される「南華」は、『南華真經』のことで、即ち『莊子』が用いられていたこ

とが示されている。『莊子』はもちろん道教経典ではあるが、仏教経典からの影響を受けて作成された道教経典ではない。また、敦煌文献中に残された道教の俗講の台本となる写本と考えられる BD1219、7620 の両文書との繋がりもはっきりしないのだが、敦煌文献中に残された『莊子』の多くが郭象注である中、注のつかない『莊子』白文本 2 点の存在 (P.4988、羽 019R) が注意を惹く。この 2 点の白文本は、元来一つの写本が二つに分断されたものであったことが分かってきているが、そのうち、P.4988 の背面には「目連変文」が書かれていることが注目される。白文本『莊子』自体が、全編説話で構成される「讓王篇」であることを考え合わせると、その表文書と紙背の文書の両面に関連があるとの推測もなりたち、道教の俗講で『莊子』讓王篇の説話が用いられていた可能性が考えられる。この点にはさらに別の資料を用いての検討が必要だが、この文書の存在は重要である。

(2) BD7620 文書の解読結果から、この文書が道教の俗講中に用いられた台本に相当するもので、音楽を伴い、聴衆を巻き込んで進行する構成など、娯楽性の高い傾向を持つものであることが確認できた。

以上のことから、道教の俗講に関連されると考えられながら、具体的なつながりが説明できずにいる「葉浄能詩」(S.6836) も説話をつなげる形式で、娯楽性を有しながら全体の物語を進行させる形式をとっている。これまでその関連を確認することができなかった俗講との関係を説明する方向が確認されたと考えている。

今後は、その両者間に存在する発展形態をさらに検証し、さらには後世に展開される講唱文芸との繋がりを明確にしていくことができるのではないかと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

荒見泰史

「敦煌本『仏説諸経雜因縁因由記』と唱導、査読有、国立歴史民俗博物館報告、第 188 集、2017、p.125 - 146

遊佐昇

「道教の俗講に見られる劇場空間」、査読有、敦煌写本研究年報、第 10 号、2016、p.205 - 211

劉勳寧

「西寧話の声調 漢語研究の新貌；方言、語法与文献」香港中文大学中国語研究中心、2016、p.119 - 126

荒見泰史

「敦煌唱導資料の総合的研究総序」査読有、敦煌写本研究年報、第 10 号、2016、p.169 - 176

荒見泰史

「敦煌の仏教儀礼と講唱文学 P.2091 『讚釈文』、『踰城日文』を中心として」東方学研究論集[日英文分冊] 臨川書店、2014、p.34 - 45

荒見泰史

「温室経講経与俗講、唱導」出土文献研究視野与研究、第 5 輯、国立政治大学中国文学系偏印、2014、p.217 - 244

荒見泰史

「二月八日の出家踰城と敦煌の法会、正道」査読有、敦煌写本研究年報、第 8 号、2014、p.31 - 45

遊佐昇

「道教唱導文的形成」査読有、中国俗文化研究、第 9 輯、中国四川大学中国俗文化研究所、2014、p.3 - 11

遊佐昇

「道教の俗講とその展開」査読有、新しい漢字漢文教育、第 57 号、全国漢文教育学会、2013、p.18 - 28

〔学会発表〕(計 1 件)

遊佐昇

「道教の俗講に見られる劇場空間」敦煌学国際学術研討会、京都大学、2015 年 1 月 28、29 日

〔図書〕(計 1 件)

遊佐昇

『唐代社会と道教』東方書店、2015、479

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

遊佐 昇 (YUSA, Noboru)

明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：40210588

(2)研究分担者

荒見 泰史 (ARAMI, Hiroshi)  
広島大学・大学院総合科学研究科・教授  
研究者番号：30383186

劉 勲寧 (RYU, Kunnei)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90261750

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )